

令和8年度「全国学力・学習状況調査」大阪市立豊崎小学校の結果概要

今年度の調査では、国語・算数ともに大阪市平均正答率および全国平均正答率を大きく上回る結果となった。

国語では、全国平均よりも13.1%、大阪市との比較では実に15%も上回る結果となっている。

算数ではさらに児童の頑張りの結果が顕著に表れ、全国平均よりも18.6%をも上回る結果となった。特に算数においては、すべての領域で大阪市平均を10%以上上回る正答率の結果となっており、基礎基本の学力がしっかり定着しているといえる。

国語に関してもすべての内容、領域において全国平均を上回る正答率となっている。

なお、平均無解答率については、国語・算数いずれの教科においても全国・大阪府及び大阪市平均を大きく下回っており、最後まであきらめずに解答しようと努力した児童の姿勢が表れた結果となった。

分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

【国語】

すべての出題領域において、全国平均・大阪府平均を上回っている。特に「知識及び技能 (1)言葉の特徴や使い方に関する事項」「C読むこと」の2項目においては、平均正答率がともに80%を超える高い数値を示している。主体的・対話的な学びを推進するため、引き続き個別に応じた課題の設定や読書時間の確保、読み手を意識した文章構成の工夫を充実させ更に学力向上につなげていきたい。

一方「B書くこと」の項目については、全国平均を上回ってはいるものの、正答率としては54%にとどまった。全国平均正答率も低い値ではあるが、今後も「自分の考えが伝わるような書き表し方の定着」がしっかりと図れるような指導法の工夫や児童が文章を書く時間や場面を増やすよう改善を図っていく。

【算数】

国語と同様に、すべての出題領域において、全国平均・大阪府平均を上回っている。これは年間を通し、単元の中で計画的に習熟度別・少人数学習を実践している成果といえる。習熟に応じたクラスの中で、反復練習に取り組んだり、具体物・半具体物の操作等の活動やさまざまな視点で意見を交流させたりすることが児童の理解に繋がっていると考ええる。

この実践を今後も継続して行い、正答を目指すだけでなく、その過程について児童同士が主体的に学習に参加できるよう更に授業改善を行っていききたい。なお「A数と計算」領域に関しての正答率は83.9%となっており、全国平均を22.8ポイント以上も上回っており、本校の「計算朝学習」の成果であると考ええる。

質問調査より

「人が困っているときには、進んで助けていますか」「いじめはどんな理由があってもいけないことだと思いますか」「自分にはよいところがあると思いますか」の質問では、肯定的に回答した児童が、それぞれ97%という非常に高い割合であった。これは、家庭の深い愛情の中で育まれた素地であることはもちろんだが、学校教育の中で日々実践を行っている、自分の命・相手の命を尊重する教育や人権教育の積み重ねが、児童の心に浸透し、結果に表れている。

また「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」の質問には肯定的な回答が100%となっており、児童と教職員の信頼関係の深さも数値として表れていた。

一方、日々の生活面では課題がみられた。「朝食を毎日食べていますか」「毎日決まった時刻に寝ていますか」等の質問では、肯定的に回答する児童の割合が、全国平均を下回る結果となった。今後は「早寝・早起き・朝ごはん」等日常生活において規則的な生活習慣をきちんと身に付ける指導を、学校・家庭・地域と連携し継続的に行っていく必要がある。

今後の取組（アクションプラン）

学力に繋がる基盤として、児童らが主体的に学校生活を楽しみ、心身ともに健康であり、そして日々の学習にやりがいを感じながら、前向きに生活していくことが重要であると考ええる。そのためにも、大阪市の教育振興基本計画の9つの基本的な方向（柱）を教職員一人一人が念頭に置き、子ども達とともに汗をかいていきたい。

○「誰一人取り残さない学力の向上」のため、大阪市の取組施策のひとつである「主体的・対話的で深い学びの推進」を基本とし、各学年での授業改善に継続して取り組んでいく。特に、国語科・算数科においては「習熟度別・少人数学習」を引き続き実践するとともに「教科専科学習」についても年間を通して計画的に進めていく。

○「教育DXの推進」のためICT機器を積極的に活用し、デジタル教材や一人一台端末による個別最適な学びの充実に努める。そして引き続き、児童の未来に生きる基礎・基本的な学力の定着と底上げを行っていく。

○児童の「豊かな心の育成」のために、児童に関わる教職員の人間性と資質の向上を図り続けていく。そのためにも、引き続き、教職員自身が校内外を問わず研修研鑽に努め、児童に還元できるようにする。

○家庭・地域との連携を更に密にし、児童に「体験・理解・協働」の喜びを味わわせていく。